

こどもは心のままにせさすべし

小金原団地自治会 会長

かとう すすむ

加藤 暹

「おやじニュース」第18号に栗ヶ沢小学校今村校長先生が“子どもたちの自己肯定感を高めたい”という栗ヶ沢小学校の教育指針とそれに対する思いを述べられて、子どもたちの自信喪失の原因として現在の学習評価の在り方を指摘されていました。子ども一人ひとりがもっている豊かな可能性を見だし、それを慈しみ育て、子どもが自分の存在に自信を持てるように(自己肯定)手を差し伸べていくことが子どもの教育の原点であると思うのですが、教育の現場では、兎角結果のみが重視され、更には子どもの変化を数値で示し、数値化できないものは教育価値として認められない、というような状況に歪められてきていることを今村先生は指摘しておられるのではないのでしょうか？

個性豊かで“みんなちがってみんなよい”と認め合う中で、学校でも家庭でも、もう少し子どもたちが“心のままにせさす”環境をもう一度大人の責任で作りに上げていくことが大切と思います。

“心のままにせさすべし”とは世阿弥が「風姿花伝」- 能楽-第一篇「年来稽古条々」の中で指摘していることで、能役者の一生を年齢によって七期に分け、最初の期を七歳頃としてここが稽古の大事な始まりであり、「自然とし出だす事に、得たる風体(ふうてい)あるべし。(中略)ふとし出ださんかかりを、うちまかせて、心のままにせさすべし、と言っています。これは“当人が自然にやりだす趣を干渉せずに自由にやらせなさい”ということで、七歳になったわが子が自然にやりだすことを、耐えてそして耐えてじっと観察する、そうすればその子の得意が見えてくる。これがまさに子どもに自己肯定を見いださせる支えになる、という含蓄のある言葉だと改めて感じ入ったところです。